

選ばれる言語聴覚士学科であるためには

～他医療関連職種 1 年生へのアンケート調査をもとに～

竹内 洋彦^{a)}

a 長野医療衛生専門学校 言語聴覚士学科

To be selected by students, what should we do?

Hirohiko Takeuchi^a

a Department of Speech-Language-Hearing Therapists, Nagano Medical Hygiene College

要旨：言語聴覚士という職種の良さや大切さを広くアピールすることは、我々の学生募集活動の困難をなす部分である。しかし、それを多くの関係者と共有できていてもなお、思うような募集結果に結びついているとはいいがたい。今回は近接する専門職を選んだ学生に言語聴覚士という職種について尋ねた。初めての調査であり、いくつかの基本的な質問に答えてもらうのみではあったが、量的データを通して、言語聴覚士がいかに関心されているか、どのような情報が進路選択において望まれているか、など、我々の学生募集活動の方向性にも資する結果が得られた。

キーワード：言語聴覚士養成、医療関連職種、高校生の進路選択

はじめに

言語聴覚士(以下、S T)は、理学療法士(以下、P T)、作業療法士(以下、O T)と並ぶリハビリテーション専門職(以下、リハ職)の中では、最も国家資格としての歴史が浅く(理学療法士及び作業療法士法は昭和 40(1965)年制定だが、言語聴覚士法は平成 9(1997)年制定)、またその絶対数においてもかなりの差がある。それぞれの職能団体の会員数では、日本理学療法士協会が 136,357 名(2023 年 3 月末)、日本作業療法士協会が 62,294 名(2020 年 3 月末)であるのに対し、日本言語聴覚

士協会(以下、S T協会)は 21,081 名(2023 年 3 月末)である(それぞれの協会のホームページ調べ)。

このような数字から、弱小職種とも取られがちだが、実際の現場では P T・O T に比べて「得がたい職種」とされ、人員確保についても厳しい見通しを持つ病院・施設も少なくない。¹⁾

さて、その S T の「得がたさ」はどこから来るのかということ、残念なことに、その供給数の絶対的な少なさが一因であることは否定できない。S T 協会では、言語聴覚士法制定当時 16 校だった養成校が

a 長野医療衛生専門学校

〒386-0012 長野県上田市中央 2-13-27

takeuchi@nagano-iryousei.ac.jp

2018年現在で75校(82課程)に増加したとしている²⁾しかし、年間のST国家試験合格数で言えば1,969人(2023年)に過ぎず、PT国家試験合格者数11,312人(同)との違いは歴然としている(いずれも厚生労働省公表値)。この数字ばかりではなく、言語聴覚士養成校の学生数の状況においても、我が校のみならず多くの養成校で定員割れ傾向が続いており、需給関係のアンバランスが解消される方向には全く進んでいない状況である。

つまり言語聴覚士になるという進路が、職業選択場面にある高校生から選ばれていない状況と言えるのだが、これを少しでも良い方向にもっていくためには、その背景や原因を知る必要がある。今回、基礎的資料とすべく、ST以外のリハ職及び看護師の養成課程にいる学生に対し調査を行ったので、若干の考察とともに報告する。

方法

信州大学及び同大学医学部附属病院言語聴覚士寺島さつき氏の協力を得て、「リハビリテーション概論」を受講している同大学医学部保健学科(看護師、PT・OTの養成課程)の1年生を対象に、Googleフォームにより調査を実施する。

質問項目は、

1. 専攻科について
 2. 大学入学「前」、STという職種を知っていたか。
 3. (STを知っていた学生に)どのような経緯で知ったか。
 - 3-1.(同)STよりも現在の職種課程を選択したのはなぜか。
 4. (STを知らなかった学生に)STという職種を入学前に知っていたらSTを選んでいただと思うか。
 5. 将来の職業選択を考える上でどのような情報があると嬉しいと思うか。
- である。

結果

調査の概要

対象者：信州大学 医学部 保健学科 1年生 103名

調査日：2023年11月8日(水) 「リハビリテーション概論」講義

調査方法：Googleフォームでの回答

回収率：100%

1. 所属している学科について

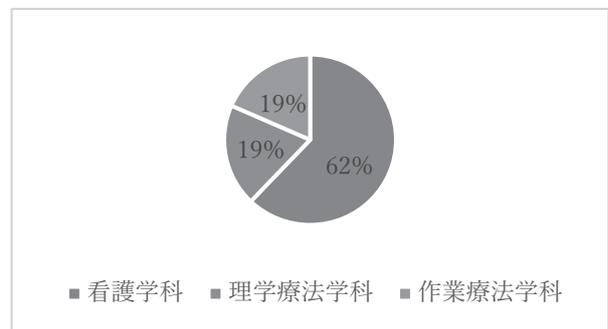


図1. 回答者の所属学科

回答者の所属学科は図1の通り。実数としては、看護学科64、理学療法学科20、作業療法学科19、の計103人だった。

2. 大学入学「前」、STという職種について知っていたか。

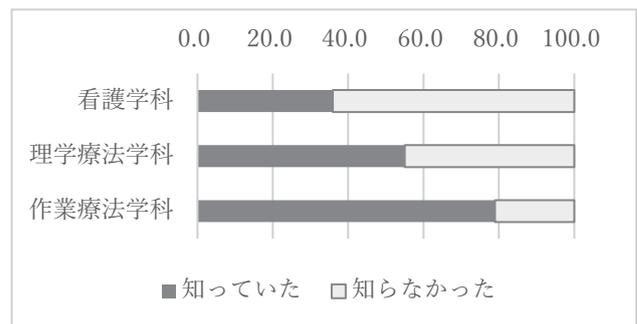


図2. 大学入学「前」、STを知っていたか。

全体では、知っていた49人(47.6%)、知らなかった54人(52.4%)と、知らなかった学生の方が多かった。

学科別に見ていくと、グラフで示すように大き

な差があり、看護学科で知っていたのは23人35.9%、理学療法学科で11人55.0%、作業療法学科で15人78.9%(看護学科と作業療法学科間では $\chi^2=9.254$, $p<.01$)。PT学生とOT学生でも20ポイント以上の差があり、STの認知度では同じリハ職学生内でもかなり異なっていることが明らかとなった。特にPT学生では半数近くが同じリハ職種のSTを知らなかった。

3. STを「知っていた」方に質問です。どのような経緯で知っていましたか？

表1 どのような経緯でSTを知ったか。

経緯	人数(%)
メディア(テレビドラマ、ドキュメンタリーなど)で知った	22 (44.9)
高校の進路相談や指導にて知った	19 (38.8)
家族がSTを受けたことがある	5 (10.9)
家族・親族や友人を通じて知った	5 (10.9)
中学の職業体験で	2 (4.1)

上から3項目が予め設定した選択肢で、その下2項目が自由記述で得られた回答である。自由記述の回答中で、質問の趣旨からみて選択肢への回答に含めて良いと考えられた回答については、選択肢への回答に含めた。その他自由記述での解答は、

- ・他大学のオープンキャンパス(看護)
- ・通院先の病院にいたから(OT)

だった。

やはりメディア経由で知る場合が4割以上に上り最も多かった。高校の進路指導場面でも4割近い学生で情報提供されていることが分かる。

3-1. STを「知っていた」方に質問です。STよりも現在の職種課程を選択した理由を教えてください。(複数選択可)

この設問は複数選択可で尋ねているが、全49人の回答者のうち、45人が「選択した職種(理学・作業・看護)が目指したい職業だったから」と答え

た。つまりSTを知っていた学生の9割以上が、知った上でSTを選ばなかったことになる。

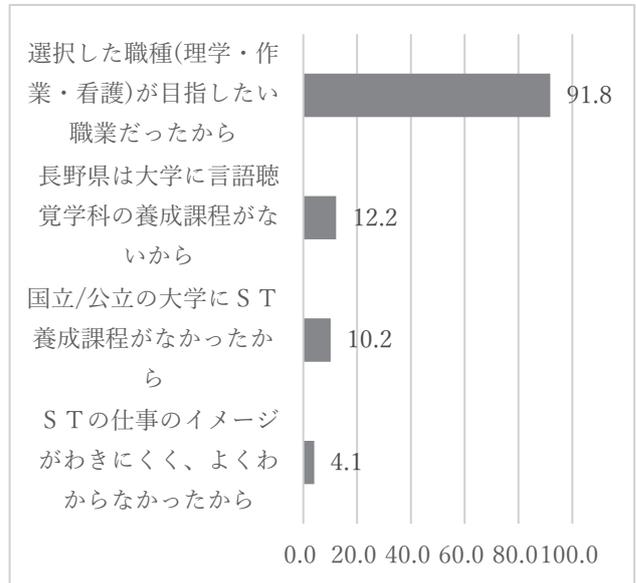


図3. STよりも現在の職種を選択した理由(%)

4. STを「知らなかった」方に質問です。STという仕事を入学前に知っていたら選んでいましたか



図4. (STを知らなかった学生向け)STを入学前にもし知っていたら。(%)

こちらも「今の選択した職種」が9割近くとなり、「知っていた」回答者の場合とやはり大差はない傾向だった。医療系を志す学生の選択には残りにくい実態があると言わざるを得ない。

5. 将来の職業選択を考える上でどのような情報があると嬉しいと思いますか？（複数選択可）

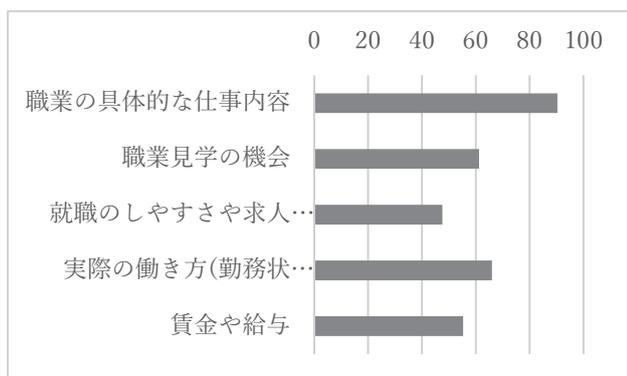


図 5. 職業選択にあたって欲しい情報は？ (%)

予め用意された選択肢はグラフ中の5つで、こちらも複数選択可能であることから、それぞれ高い割合で選択されたものの、STが売り物にしている「就職のしやすさや求人状況」は5つのうち最低で、選択肢の中で唯一半数以下だった。このほかの自由記述の回答は、「資格の取り方、資格が取れる学校(看護)」「その職業の特徴(看護)」「学べる環境が近くにあること(PT)」が1件ずつだった。

考 察

1. STをどう知ってもらうか。

大学入学前にSTを知っていたのは、全体で49人(47.6%)と半数以下だったが、結果の項で示した通り学科ごとの差も大きかった。その差の原因を、知った経緯についての回答から探してみたい。

図6は、STを知った経緯についての学科別の状況である。複数回答を実数で示しているため、若干判りにくい部分があるが、「高校生の進路相談や指導にて知った」という項目では、看護学科とPT・OT学科でかなり差が出ていた。看護学科では64人中5人が「高校生の進路相談や指導にて知った」としているのに対し、PT学科では20人中6人が、OT学科では19人中8人がそのように答えている。看護学科とPT学科を比較すると $\chi^2=6.592$ $p<.05$ 、看護学科とOT学科の比較でも $\chi^2=13.04$ $p<.001$ と有意

差が認められた。PT学科とOT学科の比較では、 $\chi^2=0.621$ で差は認められなかった。これらから、高校での進路指導では、リハ職志望の高校生に対して、指導教員からSTについての情報提供は一定程度強力にあるものと認められ、高校訪問の効果は現れていると言える。

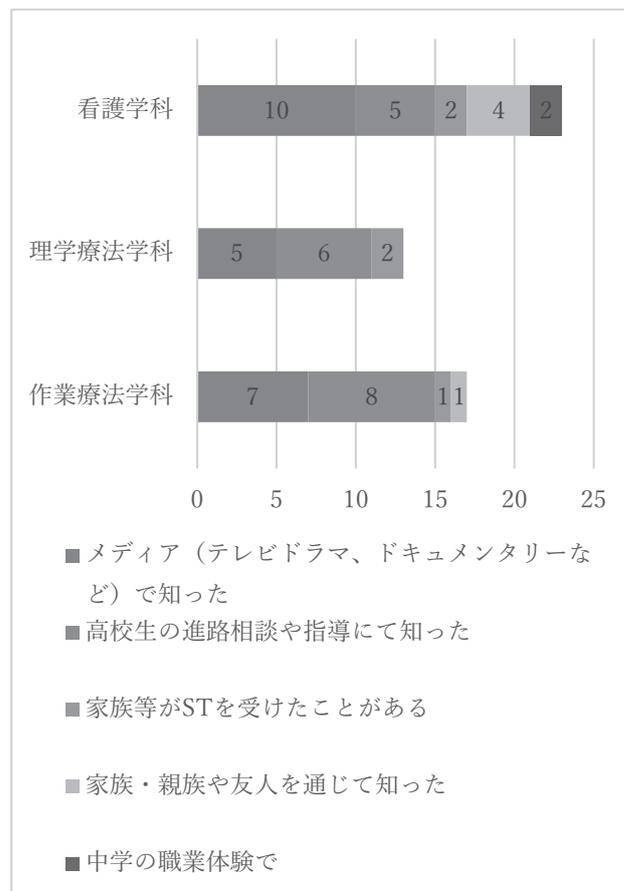


図 6. STを知った経緯の学科別比率 (%)

知った経緯については、家族がSTサービスを受けているのは全回答者の5%程度だった。高校訪問などでは、部活などで実際にPTのサービスを受けて進路を決める例が多いことを進路指導の先生から伺うことも多い。やはり、自分や家族がそのサービスを受けていれば、その職業についてより良く知ることができ、かなり強い動機付けとなるのだが、STの絶対数の少なさと高校生にサービス提供場面を直接見せることのできる機会のなさも、状況改善

の難しさの一端だろう。更に、新型コロナウイルス感染症の蔓延により、我々がサービス提供している高齢者への面会機会の制限も不利な点として指摘しておきたい。

2. どうであったら、STを進路として選択していたか。

大学進学前にSTという職種を知っていたが、それを選ばなかった学生が相当数(今回、知っていたと回答した学生49人)いた。なぜ選ばなかったのかについての詳細は、今後の調査を待つ必要があるが、今回「選択した職種(理学・作業・看護)が目指したい職業だったから(45人)」とは回答しなかった(一定の条件が満たされていれば、現在の進路ではなく、STへの道を選んだ可能性が大きい)学生が4人(49-45=4)おり、その回答は、今後我々が展開すべき活動への重要なヒントになるはずである。それらの回答は、

- ・長野県は大学に言語聴覚学科の養成課程がないから(OT3人)
- ・私立大学しかなかったため。(看護)

だった。サンプル数が少なすぎるとは言え、これらからすると、まず大学での養成が必要で、更に言えば県内に大学でのST養成課程のあることがST志願者を増やしていくことへのポイントになるのかもしれない。実際、文部科学省の調査(令和3年度学校基本調査(確定値))³⁾においても、大学学部在学者数は291万8千人と過去最多だったのに対し、専門学校は60万七千人(学校数は23校減)で、大学への志向は根強いと言える。

3. 我々はどのようにアピールしていくべきか。

「選ばれるST学科へ！」と唱えても、選ぶ主体を知り、それに合わせたアピールをしていかないと意味がない。

今回の調査では、職業選択に向けて欲しい情報とされたのは、「具体的な仕事内容」が90.3%と圧倒的に高率であり、そこを高校生等に届くよう発信していくことが非常に重要であることが判った。次い

で「勤務状況・雇用形態」(66%)、「職業見学の機会」(61.2%)も6割以上の希求率だった。関連領域の調査(高校生の進路と職業意識に関する調査(独立行政法人国立少年教育振興機構)(2023))⁴⁾でも、日本の高校生が職業選びで重視するポイントは「仕事の環境」「安定性」となっており、10年前に比べると「収入」や「勤務先の福利厚生」を重視する傾向が高まっているという。我々STが勤務するような医療・介護の法人は、経営や勤務形態の点では社会的規範に照らして問題とされるようなことは多くはないはずで、そこは高校生に対して明確にアピールすることで安心して目指してもらえるようになるのではないだろうか。

「職業見学の機会」が6割以上の希求率だったが、前出の調査⁴⁾でも、日本の高校生は「進路に関わる活動の関心が高く、学習も行われているが、実際の体験が少ない」という特徴が指摘されている。また「高校生と保護者の進路に関する意識調査」(一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ合同調査)(2019)⁵⁾でも「保護者が高校の進路指導に要望することは、「進路に関する情報提供」と「進路・職業を知る体験・実習の機会」とされている。実際の現場を見聞する機会は、病院・施設やそこで働くSTの協力が不可欠である。感染対策など、5類移行後も難しい面はあるだろうが、県言語聴覚士会など職能団体とも協力して、そのような機会をできるだけ多く提供できるよう努めるべきだろう。

更に、日本の高校生は「今の生活に満足しているが、将来への不安が強い」との上記調査結果である。STは勤務先の安定度などから将来にわたって安心して従事できる仕事であり、またAIなどにも取って代わられにくい業務内容でもある。そういった面もアピールしていくことが効果的と考えられる。

一方で、5つの選択肢の中で唯一過半数に至らず(47.6%)、最低の希求率だったのが「就職のしやすさや求人状況」だった。我々にとってはしばしば

「強み」としてアピールされるどころだが、高校生にとってはさほど重要視されていないようであり、認識しておく必要がある。

まとめに代えて

今回、ST以外の医学関連職種の養成課程にいる学生から、貴重な情報を得ることができた。これらを参考にして、よりSTをメジャーな職業とすべく活動していかねばならない。

今回はまた、更に必要な情報も明確になったと考える。例えば、"3-1. STを「知っていた」方に質問です。STよりも現在の職種課程を選択した理由を教えてください。"では、現在進路として選択した職種とSTを比較した上で、STが選択されておらず(回答者49人中45人で)、また同じ質問で「STの仕事のイメージがわきにくく、よくわからなかったから」のは2名(4.1%)しかいなかった。つまりある程度STについて理解した上で選択していないことになるのだが、STのどのようなところが選択しなかった理由だったのか、STをどのように捉えたから選択しなかったのか、やはり明らかにしていく必要がある。

また、STを知らなかった学生への類似の質問(4. STを「知らなかった」方に質問です。STという仕事を入学前に知っていたら…)に対しても、ほぼ同様の回答となっている。それらの理由(背景に

あるもの)を究明することは、今後の我々のアクションを合理的なものにするために不可欠であろう。

謝辞

今回の調査を、実際に学生に対して実施して下さった信州大学医学部附属病院リハビリテーション科言語聴覚士寺島さつき氏に心から感謝いたします。

利益相反の開示

本論文の筆者について利益相反はない。

文献

- 1) 理学療法士・作業療法士・言語聴覚士需給調査, 四病院団体協議会, 2016.
- 2) 言語聴覚士養成教育ガイドライン, 一般社団法人日本言語聴覚士協会, 2018.
- 3) 令和3年度学校基本調査(確定値)の公表について, 文部科学省, 2023.
- 4) 高校生の進路と職業意識に関する調査報告書 - 日本・米国・中国・韓国の比較-, 独立行政法人国立少年教育振興機構, 2023.
- 5) 高校生と保護者の進路に関する意識調査 一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルートマーケティングパートナーズ合同調査, 2019.